新　刊

□千葉県史料研究財団（編）：**千葉県植物誌** 1,181 pp. 2003. ¥9,500.（送料別）. 同財団.

千葉県の自然史12巻の一つで，編集責任者は大場達之氏である．検索表，種類の記述，カラー図版，生態系列図，分布図，植物方言，フェノロジー，群落名，索引，こう書くと従来の他県の植物誌とあまり違いがない見出しになるが，大場氏独特の工夫が至る所に盛り込まれており，類例を見ないものになっている．

検索表は本書のみで同定できることを目指したとのことで，他書のそれとはかなり異なった視点がある．グループによっては，花序によるものと枝葉によるものと二通りの検索表が示されている．植物の記述は簡潔で，引用標本は特殊な場合以外は省かれている．県内でのその種類の産状や分布に関する文献が引用されている．記述の最後に，形態，生態，定着度，保護カテゴリーなど多くの特性が，キーワードおよび数値で列挙され，その説明は凡例に詳しく示されている．

カラー図版は生植物を大型高密度スキャナーで取り込み，大場氏自身の手法でパソコン処理して編集したもので，全形，花，果実，種子，部分，ときには顕微鏡写真など各時期の映像が一覧できる．印刷の際の網かけとの関係だろうが，細部が多少不明なものもたまにはあるが，われわれが自力でこういうカラー図鑑を作れることを示してくれた点，今後の追随発展が期待される．奥山春季氏が生品をもとに，原色日本野外植物図譜を，苦労して作っておられたことを思い出す．

多軸生態系列図は，県のすべての生態系を群綱レベルで整理して遷移系列別に関係づけた図上に，対象となる 504種類を位置させたもので，従来の図鑑の「生育環境」を生態学的に表現する試みである．分布図（これも独自のプログラムによる）はカラー段彩の基図を用いているが，1頁に20種類（全2,786種類）を収めてあるので，分布点の少ない種類はまぎらわしい．

フェノロジーでは，草本172種類の葉，花，果実の状態が月ごとに記号化されており，種類の特性を示すと共に，二年生とか春植物とか常緑とかの表現の共通化をはかり，同じ種類でも地域による生活特性の違いを比較する手段を提供している．植物方言は川名興氏の資料を基に，その後の広範な調査結果や文献情報を加え，地域名と共に種類別に示されている．

予算の関係もあるのだろうが，非常に多くの情報が密度濃く詰め込まれており，率直に言えば読みにくい．普通に編集すれば，倍以上の頁数になるだろう．本書は千葉県植物の資料集として作られたものなので，通読が目的ではなく，むしろ「辞書・事典」と考える方が，その価値を正当に評価したことになると思う．実際，巻頭の凡例を熟読理解していないと，本書を十分利用できないだろう．図版，多軸生態系列図，分布図などの画像は，ウェブサイトを作るなり，ROM を別売するなりして，別途に参照できるようにすれば，利用にも便利だし改定も楽に行えるだろう．ともあれ，前例のない仕事をされた大場達之氏はじめ，千葉県の関係諸氏に敬意を表する．購入希望者は同財団（〒260–0013 千葉市中央区中央 4–15–7 千葉県文書館内 TEL 043–221–5100）へ．（金井弘夫）

□矢原徹一（監修），永田芳男（写真）：**絶滅危惧植物図鑑レッドデータプランツ** 719 pp. ¥4,200. 2003. 山と渓谷社.

各頁一種類または二種類が，全形，花や要点のアップのカラー写真で示される．記事としては危惧ランクと47都道府県での存在状況一覧表，植物解説のほかに，撮影記という見出しがあり，撮影者だからこそ知っている激減状態や生態など，いろいろ興味あることがのべられている．従来の図鑑にはなかったもので，ユニークな企画である．

587頁に「その他のレッドデータプランツ」という見出しがあり，601頁まではカラー図鑑（学名なし）が続き，以降679頁までは植物名（学名つき）と都道府県存在状況一覧表の組み合わせ，679，680頁は植物名だけのリストとなっている．この587–680頁の部分は頁下欄に「その他のレッドデータプランツ」

という見出しが続いているので一連のものと思うのだが，図鑑の主体部分との関連がよくわからない．はじめのうち，「その他」というのは国のRD指定に漏れた，地域の危惧種のことかと思ったが，内容はそうではないらしい．そういえばこの本には「凡例」がないので，このような全体の構成についての情報が不足しているのは残念である．出版社に問い合わせたところ「その他のレッドデータプランツ」とは，締切りまでに写真が入手できなかった種類だそうだ．ところが刊行が遅れたために，その間に写真取材できたものがあり，601頁まではとりあえずそれらを収容したとのことである．この部分の植物名は602頁以降のリストに学名と共に収容されている．

686頁以降に学名と和名の索引（いずれも危惧ランクつき）があるが，学名索引を見ているうちに妙なことに気がついた．たとえば *Melastoma tetramerum* のランクはCRで，*M. t.* var. *pentapetalum* はVUである．*M. tetramerum* にはすべての種内群が含まれるのだから，母種の評価がCRであるのにその一種内群であるvar. *pentapetalum* の評価がそれより緩いVUであるのは矛盾していると思う．このCRと評価されたタクソンはvar. *tetramerum* ではあるまいか？*Primula tosaensis* や *Tropidia nipponica* でも同様なことが見られる．このautonymは *Limonium wrightii* や *Orostachys malacophyllus* では使い分けられているケースがあるので，学名の採用に配慮が必要だったと思う．

Autonymはsensu latoやs. str.のあいまいさを避ける手段として作られたものと理解しているが，その定義が同じランクの他のタクソンに依存しているため，常に同じとは限らない．つまりautonymは本家を意味し，他の同ランクの名前は分家を意味する．したがって分家が増減すれば本家の持分も変わる．おまけに，少なくともわが国では，autonymが本家なのか「一家」なのか，明確な意識のないまま使われている．これは命名規約の問題である．だから上の例でも，autonymを使えば片づく問題ではないと思う．したがって評価の際に，あとで矛盾がおこらないような配慮が必要である．

われわれは日本産植物を扱うときには和名を用い，学名は意識しない．そして「最後の手続き」として学名を割り付ける．その結果としてこういう矛盾が生じるのだろう．他の文献でも同じ事例が見られるのだが，本書であらためて問題にするのは，評価基準に確率論が用いられているからである．こういうことをやるための基本的条件は，母集団の厳密な定義と標本抽出の方法である．母集団があいまいなまま処理すれば，ミリとメートルの数字を混ぜこぜにして計算したようなものになるのではないか？

自然環境調査にかかわる人達の文を読んでいると，「植物名は細かいほど正確だ」という認識が行き渡りつつあるように思われる．とくに「貴重種」ではその傾向が強い．植物は動物と違い，無融合繁殖で維持される「種類」が多いし，「細かい種類」を無視すれば地域研究者の協力を得られないだろう．自分でもフロラデータベースを扱っている関係でイヤというほど感じることなのだが，和名というものは本家と一家を区別できないうえ，データベースというものは分類学的見解を表明する手段としては不適当で，細かい名前まで保存せざるを得ない．指導的立場の人達が慎重に舵をとらないと，近い将来わが国のフロラはsplitterの修羅場になりはしないか？

（金井弘夫）